

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	第16回東邦大学医療センター大橋医学会
作成者（著者）	東邦大学医学会編集委員会
公開者	東邦大学医学会
発行日	2024.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 71(2). p.98 102.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会抄録(分科会)
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD76485359

第 16 回東邦大学医療センター大橋医学会

令和 6 年 2 月 15 日（木）17 時 00 分～19 時 00 分

令和 6 年 2 月 16 日（金）17 時 00 分～19 時 00 分

東邦大学医療センター大橋病院臨床講堂

2 月 15 日（木）

研修医研究報告 I

座長 中山晴雄

1. 動脈炎性虚血性視神経症により発見された巨細胞性動脈炎の 1 例

三宅絵理奈（1 年次研修医）

指導：今泉ちひろ，峰岸靖人，高倉悠人，小倉剛久，亀田秀人（膠原病リウマチ科）

良田浩氣（眼科）

症例は認知症の既往のある 88 歳女性。両眼失明，両視神経乳頭浮腫を認め当院眼科を受診。巨細胞性動脈炎疑いで当院膠原病リウマチ科に紹介となり緊急入院した。入院日よりステロイドパルス療法，その後ステロイドの経口投与を行ったが視力の回復はみられなかった。今回は認知機能低下により治療介入が遅れ，両眼失明に至った巨細胞性動脈炎の一例を経験したので報告する。

2. 混合性結合組織病（MCTD）に関連した無菌性髄膜炎の 1 例

澤口未来（2 年次研修医）

指導：廣内尚智，小高倫生，中野千裕，吉田悠人，松瀬厚人（呼吸器内科）

症例は 23 歳女性。X 年 X 月 X-7 日からの発熱，頭痛を主訴に紹介医に受診され，対症療法で改善を認めないため当院救急外来に X 日に受診。当時の感染状況を鑑み COVID-19 感染症等のウイルス性疾患によるものを疑ったが，入院経過で髄膜炎，頸部リンパ節炎を合併され，精査の結果 MCTD に関連した合併症が考えられた。今回初診から診断にいたるまで，入院経過で施行した画像・血液検査・髄液検査・治療を交えて考察する。

3. 壊死性筋膜炎との鑑別を要した蜂窩織炎の 1 例

三島直子（2 年次研修医）

指導：原田侑弥，福田英嗣，須藤上治（皮膚科）

50 歳男性。左下肢疼痛・発熱を主訴に当科受診された。臨床所見より蜂窩織炎を疑ったが，入院後より激しい疼痛・紫斑・水疱を認め壊死性筋膜炎が疑われた。デブリドマン施行したが，筋膜まで感染は波及していなかった。症例を通じて，蜂窩織炎と壊死性筋膜炎の鑑別についての考察を行った。壊死性筋膜炎との鑑別を要した蜂窩織炎の症例を経験したので報告する。

一般演題 I

座長 五味達哉

1. 重症筋無力症に潰瘍性大腸炎を合併した 32 歳女性例

内 孝文, 紺野晋吾 (脳神経内科)

症例は 32 歳女性. 抗 AChR 受容体抗体陽性の重症筋無力症 (MG) の診断後に胸腔鏡下胸腺摘除術の施行, タクロリムスを導入した. 後に下血し下部消化管内視鏡検査 (CS) を施行した. CS で血管透見が消失した塑像粘膜を認め, 病理組織は活動期の潰瘍性大腸炎 (UC) に矛盾しなかった. 5-ASA 製剤, 経口ステロイドの増量を行った. MG と UC は自己免疫疾患だが関連性の基礎的病態は不明である. UC 合併 MG のサブタイプは胸腺腫 MG が多い傾向にある. 両疾患の関連性の解明には今後の症例蓄積と更なる研究が必要である.

2. 静脈血栓塞栓症 (VTE) に対する DOAC と Wf の有効性と安全性の比較

千葉達夫, 小林秀樹 (薬剤部)

本研究では, VTE に対する DOAC と Wf の有効性, 安全性を比較検討した. 当院において, VTE に対して DOAC による治療開始された 366 例, Wf が開始された 74 例を対象とし解析を行った. DOAC 投与群に対する Wf 投与群の症候性 VTE の再発および出血事象のハザード比 [95% CI] は, それぞれ, 2.18 [0.31-15.12], 0.65 [0.31-1.35] であり, 両群で差はなかった.

3. 病院になぜ歯科が必要なのか

宮下直也 (日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック)

当クリニックは, 東邦大学医療センター大橋病院に週 2 回の歯科訪問診療を行っている. 多くの診療科からの依頼があり, 年間約 350 件に上る. 歯科訪問診療における治療内容としては, 義歯の調整・修理や抜歯処置が多かった. 現在, 急性期病院における歯科介入は注目されており, 約 43 万人の入院患者データを用いた周術期口腔管理の有用性について, 保険収載前後の術後肺炎, 入院日数, 入院費に関して検討した結果を報告する.

特別講演 I

座長 富岡 勤

沖縄はなぜ, 長寿でなくなったのか~栄養士の視点から~

松門 武 (栄養部 次長)

超高齢化社会に突入した我が国における長寿地域の一つに沖縄県がある. 長年にわたり「沖縄」といえば「長寿大国」として知られており, 長寿の秘訣を探るためマスコミなどが賑やかしく沖縄県の地域性や県民の食生活について取り上げてきた. 厚生労働省が調査を開始した 1975 年の統計以来, 沖縄の平均寿命は女性が全国で第 1 位とトップを維持し, 男性も 1980 年, 85 年には全国 1 位と上位を守り続けてきたが, 1990 年から 2010 年にかけて男女ともに順位を落とし, 直近の厚生労働省が公開した「都道府県別の平均寿命」では男性が 43 位, 女性も 16 位まで順位を下げ, 男性に至っては最下位になる勢いである. 長寿大国沖縄は過去のものなのか, 栄養士の視点から考察する.

特別講演 II

座長 井草ひろみ

大橋病院の看護—生きる力を引き出し, 支える看護を提供する—

遠藤敏子 (看護部 部長)

東邦大学医療センター 3 病院の看護師採用については, 法人本部看護企画室が統括している. 具体的には 3 病院の看護

師適正人員の検討，企業主催の合同就職説明会，学校訪問やパンフレット作製等である。大橋病院は3病院の中で応募数は少なく退職率も高く，副部長の頃よりリクルートを担当し，大橋病院の売りは何かと検討を重ねてきた。大橋病院の看護部の理念の変遷，大橋病院の看護について振り返ってみた。若い看護師たちから「やりたい看護ができない」という声が聞こえてくる。何をしたいのか，何ができていないのか。「生きる力を引き出し，支える看護」をしていることを自覚していないだけではないか。

2月16日（金）

研修医研究報告 II

座長 常喜信彦

1. 診断に苦慮した悪性十二指腸狭窄をきたした胆嚢癌浸潤の1例

千葉慎太郎（2年次研修医）

指導：日原大輔，岸 洋佑，渡辺早紀，齋藤孝太，竹中祐希，山田悠人，
吉田有輝，齋藤倫寛，岡本陽祐，塩澤一恵，伊藤 謙，渡邊 学（消化器内科）
渡邊隆太郎，森山穂高，浅井浩司，渡邊 学（外科）
横内 幸，高橋 啓（病理診断科）

症例は70歳代男性。嘔吐を主訴に近医受診。腹部CTで幽門狭窄，上部消化管内視鏡検査（EGD）で幽門輪から十二指腸球部に狭窄を認め当院紹介。腹部造影CTで幽門部から十二指腸に壁肥厚，EGDで上十二指腸角に狭窄を認め十二指腸原発癌が疑われた。生検で悪性腫瘍との確定には至らなかったため再度造影CT施行。胆嚢頸部に壁肥厚を認め，EGDにて再度生検。免疫染色の結果リンパ管侵襲を認め他臓器十二指腸浸潤の診断となった。以上の結果から手術施行，術中病理診断にて胆嚢癌原発十二指腸浸潤の診断であった。十二指腸狭窄の原因診断に苦慮した症例を経験したため報告する。

2. 皮膚限局性結節性アミロイドーシスの3例

山本陽織（1年次研修医）

指導：須藤上治，原田侑弥，松本千夏，高橋美咲，新山史朗，福田英嗣（皮膚科）

皮膚限局性結節性アミロイドーシスについて当科で経験した3例と，過去の報告例からその発症機序について考察した。症例1 81歳男性。左鼻翼外側に結節が発症。症例2 56歳男性。左鼻翼外側に結節が発症。症例3 79歳男性。両第1趾間に紅斑・結節が発症。皮膚限局性結節性アミロイドーシスでは形質細胞からアミロイド前駆蛋白質が単クローン性に産生される。本邦報告例では発生場所は顔面が多く，中でも鼻周囲の頻度が多い。慢性的な日光暴露や摩擦による刺激が形質細胞を増生させていると考えられる。

3. 水頭症と頸髄髄内信号を伴う成人キアリ奇形1型に対して後頭下開頭術を行い奏功した1例

武田真貴子（1年次研修医）

指導：佐藤 詳，伊藤圭介，小屋原優輝，平井 希，平元 侑，
藤田 聡，中山晴雄，林 盛人，齋藤紀彦，岩渕 聡（脳神経外科）

54歳女性。2ヶ月前から歩行障害，後頭部痛を認め前医受診し，頭部CTで全脳室拡大と小脳扁桃下垂を認め当院紹介となった。頭部MRIではMagendie孔の閉塞及びLuschka孔の拡大，頸部MRIではC1～C5Levelに頸髄髄内信号を認めた。術前診断は膜様閉塞を合併したキアリ奇形1型とし，髄液灌流障害により水頭症及び前空洞状態を呈したと考えた。治療は後頭下開頭術を行い，術中にMagendie孔部に膜様組織を確認し切開した。術後経過は良好で自宅退院となった。膜様閉塞の治療は決まった治療方針がなく，今後も検討が必要である。

一般演題 II

座長 高橋 啓

1. 急性期脳梗塞における血栓回収療法の適応拡大

林 盛人, 岩淵 聡 (脳神経外科)

急性期脳梗塞に対する経皮的血栓回収療法は, その有効性から全世界的に普及するとともに, デバイスの改良および治療適応が拡大している。本報告では, 最新の RCT の結果を元にした, 現時点での血栓回収療法の適応について報告をする。

2. 繰り返す病的骨折から判明した原発性副甲状腺機能亢進症の 1 例

横内 幸, 浅川奈々絵, 高橋 啓 (病理診断科)
鈴木淑能, 上芝 元 (糖尿病・代謝・内分泌内科)
武者芳朗 (整形外科)
長田拓哉 (外科)
五味達哉 (放射線科)

症例は 54 歳男性。X-7 年に右肋骨疲労骨折, X-1 年 2 月に左肋骨骨折, X 年 4 月に右大腿頸部骨折にて歩行困難となった。悪性腫瘍による多発骨転移が疑われたが, 骨病変の生検にて悪性腫瘍は認められなかった。精査の結果, 原発性副甲状腺機能亢進症による骨病変と診断され, 副甲状腺左下極摘出術が施行された。明らかな外傷歴がなく病的骨折を繰り返す場合には, 副甲状腺機能亢進症の可能性も念頭において検索する必要がある。

3. 歯科を併設していない急性期病院における口腔機能管理

高橋賢晃 (日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック)

急性期病院入院中の患者は, 全身状態の低下に加えて口腔清掃状態が不良な者や急性疾患により歯科受診が途絶えた者が多い。そのため, 口腔内環境の改善が必要であるが, 限られた入院日数の中では, 抜歯処置による感染予防や口腔衛生管理が主となる。急性期病院における歯科の介入は, 回復期, 維持期におけるシームレスな口腔機能管理に不可欠である。今回, 入院中の患者に対して歯科介入により良好な結果が得られた症例について報告する。

特別講演 III

座長 大平征宏

わが国の副腎偶発腫について

上芝 元 (糖尿病・代謝・内分泌内科)

副腎に腫瘍が CT や MRI などの画像診断で偶然発見されたときに, それらを副腎偶発腫と総称する。近年画像診断の進歩と普及に伴い増加傾向にある。厚生労働省の副腎ホルモン産生異常に関する調査研究班の一員として副腎偶発腫の全国調査を行った。3672 例の解析を行ったので, 本講演でその概要を紹介します。

特別講演 IV

座長 國正妙子

エネルギー代謝から見た心不全へのアプローチ：人生 100 年時代の課題

諸井雅男 (東邦大学医学部内科学講座循環器内科：大橋病院)

高齢化社会を迎え, 心不全患者は増加している。心不全をきたす基礎疾患 (冠動脈疾患や弁膜症など) に対する外科治療やカテーテル治療の進歩や多職種が関わるチーム医療がおこなわれているが, 心不全の予防や内科的アプローチも必要である。特に生活習慣病に起因する心不全や高齢者で多く認められる拡張障害による心不全の克服は喫緊の課題である。

本講演では1日10万回収縮弛緩を繰り返す、多くのエネルギーを産生・消費している心筋収縮細胞のエネルギー代謝の維持や回復にはどうすればよいかを進化生物学（適応と進化）の観点から考える。